

そのらしさを発揮しながら、育ちを支える(幼小接続)

A男の育ちを追いながら

上田 晴之

I. はじめに

2010年11月11日に文部科学省は「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について」で「子供の発達や学びの連続性を保障するため、幼児期の教育と児童期の教育が円滑に接続し、体系的な教育が組織的に行われることが極めて重要である」と示した。

福井県では2012年10月に幼児教育支援プログラムを作成し、11月に幼児教育支援センターを立ち上げ、保幼小接続の在り方についてモデル校区を指定し、「連携」から「接続」への実践を深める研究を行ってきた。そして、2014年には「福井県保幼小接続カリキュラム」を作成し、どの小学校区でも保幼小接続の一層の促進を図ってきた。福井県は、幼小接続において全国の中でも先頭に立ってリードしてきた立場である。

2021年7月8日に中央教育審議会では「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」を設置した。幼保小の架け橋プログラム「幼児教育スタートプラン」を踏まえ、幼児教育の質の向上、幼保小の円滑な接続に向けての議論が国をあげて今もなお進められている。

では、福井大学教育学部附属幼稚園、附属義務教育学校前期課程の幼小接続の取組としてはどうだろうか。

幼小接続会議、移行支援会議など年間予定に位置付けられており、年長児と前期課程1年生の交流も年2～3回計画され、進んでいるようにも思える。

しかし、実際の幼小交流はイベント的に終わることも多く、幼稚園職員と義務教育学校教員との面識も実はあまりなかったように思える。少なくとも私自身が附属幼稚園に異動してきた時はそのように受け取った。

幼小接続とはいったい何のためにするのか。それは、ま

さしく「育ちをつなぐ」ために行うと私は考えている。幼児期で育ってきた資質・能力を学童期でいかに自分の力として発揮していくことができるのか。力を発揮するためには、一人一人が安心感をもち、自分の居場所があることが大切であり、また力を発揮するために、教員同士が密に連携を図りながら、育ちのストーリーを追っていく必要がある。

今回、現在前期課程1年生A男の幼稚園年中児から今までの育ちを追いながら、子供たち一人一人がそのらしさを発揮していくために、教師はどのように育ちを支え、つなげていくことが大切なのか、幼小接続の核となる部分は何なのかを読み解いていきたい。

II. A男について

1. 入園願書より

2018年10月、一通の入園願書を見て、職員室がざわめく。A男の願書内の「健康・発達上配慮してほしい事」の欄に「高機能自閉症の為、対人関係が苦手。」と記入されていたのだ。

現在附属幼稚園でも、インクルーシブ教育として、一人一人の特性を集団の中で生かしながら、個においても、集団においても高めていくという教育を実践しようとしているので、自閉症スペクトラムとあってもそこまで問題ではないのかもしれない。

しかし、入園選考のための願書で、最初に「自閉症」というワードを見れば、多少なりと教員らがざわめくことは当然である。しかし、裏を返せば、A男の保護者は、A男の発達を受け止め、特性にしっかりと向き合っており、

選考のA男の様子を見てみようということになった。

選考当日は、こだわりはもちろん見られるものの、内容については無事通過し、入園することとなった。

2. 自閉スペクトラム症

「自閉スペクトラム症」とは、対人関係が苦手、強いこだわりといった特徴をもつ発達障害の一つである。近年では、早ければ1歳半の乳幼児健診でその可能性を指摘されることがある。

最近の調査では、子供のおよそ20～50人に一人が自閉スペクトラム症と診断され、男性に多く見られ、女性の約2～4番という報告がある。

自閉スペクトラム症が疑われる子供の特徴の一例としては、以下の通りである。(表1)

<ul style="list-style-type: none"> ・視線が合わないか、あっても共感的でない ・表情が乏しい、または不自然 ・名前を呼んでも振り向かない ・人見知りをしない、親の後追いをしない ・独り言が多い、人の言ったことをオウム返しする ・親が「見てごらん」とさしてもなかなかそちらをみない ・抱っこや触られるのを嫌がる ・一人遊びが多い、ごっこ遊びを好まない ・食べ物の好き嫌いが強い など <p>(大塚製薬 すまいるナビゲーターより)</p>

表1 自閉スペクトラム症の特徴

自閉スペクトラム症は病気というよりも、もって生まれた「特有の性質」(特性)と考え、一人ひとりの特性に合わせた教育的方法を用いた支援(療育)を行うことが大切である。

本人の「生きづらさ」を軽減させて、二次的な問題(身体症状、精神症状、自傷行為、不登校やひきこもりなど)を最小限にとどめることが、自閉スペクトラム症の対応の基本となる。

3. 保護者について

A男の父親は医者、母親は専業主婦である。送り迎えは基本母親で、幼稚園教育に大変協力的であり、理解者でもある。しかし、入園願書にも書いてきたように、A男の家での態度や姿には困り感を感じている。

Ⅲ. 園生活を通して自分を出す(年中)

1. このドアから出ないで(令和元年4月)

入園時より、好きな遊びの時は基本一人でフラフラ動き回っていた。教師はいろいろ遊びに誘うが、少しやっつは、またフラフラと動き出す。教師もA男の様子をしばらく観察することにした。

入園から3日目。好きな遊びの時間にA男が遊戯室のドアの取っ手をもって固まっている。そして、中から出ようとする子に対して、ドアを閉めて抑えて、出られないようにしていた。最初は楽しそうにドアを閉めていたが、何人かの子供たちが「やめて!」とやってドアを開けようとすると、A男の表情がどんどん厳しくなっていく。教師はその様子を見て、「A君、どうしたの?」と声をかける。A男は無言でドアを押さえる。周りの子がドアを無理やり開けようとすると、余計にA男も必死で防ごうとする。なんとか子供たちでドアを開けることができ、出ていくとA男はまたドアを閉めて押さえる。

しばらく様子を見ていた教師だが、ドアに手を挟む子が出てくる恐れがあったので、A男を抱っこし、ドアから離れた。すると、A男は大泣きを始めた。教師はなにかドアを閉めたいという理由があるのかとも思い、いろいろ質問するが泣いてばかりで話が前に進まない。しばらくその場を離れ、抱っこして落ち着いてから、話を聞くと、「閉めたかった」とA男がつぶやいた。誰かに嫌なことをされたとか、邪魔されたとかではなく、ただ閉めたかったのか。そして、他の子に「やめて!」と言われたことがなにかA男のスイッチを押したのか。原因は結局若ならなかったが、やはり特性が出ているかもしれないと感じた。A男は4～8月頃までは、ほぼ一人で教室の中を動き回るか、カーテンにくるまっているか、絵本を読んでいるかということが多かった。

教師もその都度、声をかけながらA男の様子を見守る。

2. 僕の友達!(令和元年9月)

夏休み明け、同じクラスのS男がA男を遊びに誘った。S男はADHD傾向のある子である。体が大きく、行動も直線的なので、ぶつかったり、教室からよく飛び出したりとトラブルもよく見られた。しかし、S男は根がとても優しい。

S男とA男はグループが同じで、机の席も9月から隣になった。すると、意気投合したのか、好きな遊びの時、

S男はA男を誘い、「一緒に外で遊ぼう」と肩を組みだした。A男は最初は戸惑いの表情であったが、一緒についていく。一緒に築山を登ったり、砂場へいったりして過ごした。

次の日も二人肩を組んで歩く。すると、二人教師の前に来ると、A男が「S男は僕の友達!」と言ってきた。しかもS男のことを下の名前で呼び捨てにしている。教師は目が点になった。そこから少しS男を介しながら、いろいろな遊びを経験できるようになってきた。

このかわりは何を意味するのだろうか。S男は気まぐれなところもあるので、なんとなくA男が隣の席になったし、一緒に遊ぼうかなと思いついただけなのかもしれない。またS男は他の友達とトラブルになることもあったので、ある意味A男は一緒にいて落ち着く存在だったのかもしれない。なによりもS男は根が優しいので、A男はその優しさに惹かれて一緒にいたいと思ったのかもしれない。

A男にとっては、S男が半ば強引に来てくれたことは、A男にとって初めての友達となり、嬉しかったのではないだろうか。自分から同関われればいいかわからないA男にとっては、S男の強引な引き寄せ方は心地よかったのかもしれない。

なにによりA男はS男と一緒にいることで、遊びの幅が広がり、なににより表情が豊かになった。教師がいろいろ誘ってもここまで遊ぶことがなかったのだが、子ども同士のかかわりの大切さを改めて感じた瞬間であった。

3. 発表会、上手にできた!(令和2年2月)

年中児の冬になかよし発表会があった。A男は「てぶくろ」という劇のネズミ役を演じた。ネズミ役はA男も含め、3人の男児である。その劇の中で、なにか得意なことを拾うさせたいと考えていた教師は、A男も含めネズミ役の男の子たちに「何を発表したい?」と問いかけた。教師の中では、A男が披露できるものを中心に考えなくてはという思いがあった。

A男は冬になり、遊戯室に附属義務教育学校の後期課程にお借りした大きな跳び箱をよじ登って遊ぶのが大好きだった。後期課程の跳び箱8段は幼稚園の子にとってはとても大きな山のようなものである。登ることができるととても達成感を味わうこともできる。A男は一度登れるようになってからは、毎日登って楽しんだ。

教師は、「A君ってあの大きな跳び箱をよじ登るのすごいよね!」と声をかける。するとA男は「山登りたい!」

と言い出す。他の男児らもやりたいと意見が出て、教師も「よし!」と心の中でガッツポーズをした。

発表会当日、A男の母親は不安だった。練習の様子は日々伝えていたので、上手にできることも伝わっていた。しかし、母親は本番で何か急変したら?ということが心配と教師に伝えてきた。教師も一回泣き出すとしばらくは引きずるし、その泣いたり、機嫌が悪くなるポイントも予想外のことが多かったりしたので、多少なり不安要素はあった。

教師は発表会前日、発表会と同じ時間帯で、同じ準備の仕方でも、同じ衣装をきて、同じ流れでやってみた。(図1) A男も上手にできていた。あとは本番でなんとか頑張ってもらいたいと願うことしかできなかった。



図1 発表会の練習の様子

本番当日、「てぶくろ」の劇が始まる。

A男は自分の登場シーンは完ぺきにこなすことができ、母親もとても嬉しそうにその様子を見ていた。

この発表会での成功は何を意味するのか。

A男は特に予定が変更になることが苦手である。本人なりに演じる場所がきちんと決まっていて、そして見通しをもつためのリハーサルも必ず必要になってくる。そして自信をもって望めたことが、本番の成功につながったのだろう。

しかし、このことは誰にでも言える。A男は変化に敏感であるため、より丁寧に本番に臨んだが、他にも変化に不安を感じる幼児はたくさんいると考える。A男に寄り添った保育は、まさしくユニバーサルな保育へとつながっているのではないかと考えるきっかけにもなった。

IV. 少しずつ周囲に心を開く(年長)

1. 紙飛行機作り(令和2年7月)

年中の時にS男と仲良くなり、好きな遊びで関わることあるが、S男の遊びの興味もどんどん変わっていくために、それについていけないA男の姿も見られた。そして年長になり、一人でフラフラすることが多かったので、何か周囲の幼児とつながる方法はないかと教師も模索をした。

そこで、教師は廊下で紙飛行機飛ばしをしようとA男に提案する。A男は「紙飛行機作れないよ!」と教師に言ってきた。「じゃあ、先生と一緒に作ってみよう」と一緒に折り紙で折って、第1号機が出来上がった。フラフラを的にして遊ぶ。それを好きな遊びの後のみんなの時間で紹介した。するとA男も嬉しそうに前に出てきて、自分の紙飛行機をみんなの見せて飛ばすところを見せてくれた。



図2 廊下で紙飛行機飛ばしを楽しむA男

次の日もA男は紙飛行機作りからスタートする。そして自分の紙飛行機2号機が出きると、それを廊下で飛ばして遊んだ。(図2) A男は几帳面な性格でもあるので、折り方がとてもきれいだった。そして、A男の紙飛行機がよく飛んだ。そこで、教師はその日のみんなの時間に、A男に前に出してもらい、よく紙飛行機の折り方を教えてほしいとお願いをした。A男はみんなの前で得意気に紙飛行機作りを披露する。(図3)

その後、みんなで自分のオリジナル紙飛行機を作ったり、紙飛行機の絵本を見ながら、紙飛行機にいろいろな種類があることを伝えたりと、子供たちの興味関心を高めていった。



図3 みんなの前で折り方を披露するA男

A男も「へそ飛行機つくってみよう」と他の紙飛行機作りも行いだした。

そして、他の子が紙飛行機に輪ゴムをつけ、ひっかけて飛ばすことをアイデアで出すと、その紙飛行機はより遠くへ飛ぶので、A男も輪ゴムをつけ、さらにオリジナルの紙飛行機を作り続ける。

シールを付けて、自分なりにアレンジしていく。気付くと、ロッカーの中は紙飛行機でいっぱいになった。

A男の思いを受けとめながら、ロケット的あての遊びが広がっていった。そして、A男もお店屋さん役をしながら、集団の中で遊ぶきっかけになった。(図4)



図4 ロケット的あて屋さんを楽しむ

(考察)

A男は紙飛行機作りを通して、少しずつ自分の居場所を見つけていった。そして、みんなの中に入って一緒に遊ぶ心地よさ、みんなから認められる嬉しさを味わっていく。紙飛行機をひたすら作り続けるという特性を出しながら、教師が様々な遊びとつなげていくことで、A男にとって経験の広がりへとつながっていったと考える。

2. サッカー遊びから鬼ごっこ遊びへ(令和 2 年 11 月)

10 月頃から年長の男児らは外遊びを楽しむことが多くなってきた。園庭でサッカーや鬼ごっこをして楽しむ姿も多く見られる。しかし、A 男はサッカーや鬼ごっこをしようとはしなかった。サッカーは 4 月に一度したが、サッカー中にボールの取り合いでトラブルになり、そこで大泣きをして、そこからサッカーには一切入らなくなった。また鬼ごっこはタッチされると怒って大泣きすることがあり、それ以降 A 男も自ら鬼ごっこに入ろうとはしなかった。教師は様々なきっかけを与えることで、サッカーや鬼ごっこの楽しさを味わい、また遊びの中で自分の感情をコントロールできるようになってほしいと願っていた。

教師はみんなの時間でボール作りを提案する。そして、それぞれに自分のボールを新聞紙とガムテープで作ると、それを蹴って遊んだ。(図 5)



図 5 自分で初めて作った新聞紙ボール

次の日、好きな遊びで A 男も含め、何人かが作ったボールを蹴って遊んでいる。そこに、ペットボトルを何本か置いておいた。すると、「ボーリングだ！」とそれをピンに



図 6 ペットボトルに水をいれてピン作りをする

見立てて、ボールを当てて倒しだす。でも軽くてすぐに倒れてしまう。すると、A 男はペットボトルの中に水を入れ始める。(図 6)

次の日、天気がよく、サッカー好きな男児らは外でサッカー遊びを楽しむ。しかし、A 男は教室でひたすらペットボトルに水を入れ、ピンを増やし、サッカーボーリングを楽しむ。そこに、T 男も一緒に参加し、二人で楽しんだ。次の日も、その次の日もサッカーボーリングを楽しむ。A 男が一人で遊んでいても、「入れて！」と入ってくる友達誰かがはいた。A 男もそれが嬉しそうだった。さらに A 男はボール作りも新たに取り組む。カラーガムテープで色を付け、マイボールを増やしていく。

ここで、教師は悩む。A 男はサッカーボーリングを楽しんでいるし、何人か遊びに入ってくるが、やはり一人遊びに近い。なんとかもっと遊びの中で集団の中でもまねながら、人とかかわる術を学ばせないといけないのではないか、しかしじっくりと自分の空間、遊びを大切に、このまま自分の世界で遊びたい気持ちは尊重しないといけないのではないか。周囲の子たちのように、年長の育ちとして、この集団の中で学ぶことをもっと経験すべきではないかなど葛藤をしていた。しかし、A 男にサッカーに誘っても「いかない」と言われる。どうしたらよいのか。

(図 7)



図 7 周囲の子は自分たちでサッカーを楽しむ

そこで、自分なりに出した結論は、A 男のこだわる特性を生かして、ひたすら室内でもサッカーに関わる遊びを楽しみ、楽しみ尽くしてみようと考えた。

10 月に入り、日に日にペットボトルの数は増えていく。ついに、それぞれのペットボトルに点数が付いた。しかも大きくて重いペットボトルは高得点、小さく軽いペット

ボトルは低得点とちゃんと考えて点数が付けられている。
(図8)



図8 ペットボトルはどんどん増えていく

この後、A男は1か月近くサッカーボーリングを楽しむ。(図9) そんなある日、運動会の練習のため、今まで外で使っていたサッカー場が使えず、年長保育室のすぐそばの後期課程のテニスコートの隅でサッカーをすることになった。



図9 サッカーボーリングを楽しむA男

そして、どうしても人が足りずに困っていたので、教師はA男に「A君、実は青チームの人数が一人足りないんだ！A君サッカーのキックとっても上手だし、助けてくれない？そこの新しいサッカー広場で待ってるから！」



図10 サッカー広場に出てくるA男

と声をかけてみた。9月当初はサッカーに誘っても「いかない」の一言で終わったA男だが、この日は「うーん」と言いながら、気付いたら自ら外へ出てきた。(図10)

教師は「A君ありがとう！じゃあ、A君が入ったら、青チームパワーアップだね！」と盛り上げていく。そして、A男は見事に点数を決め、同じチームの男児に「ナイス！」と声をかけられた。A男はとても嬉しそうだった。

この日から、A男は毎日サッカー広場へ行くようになる。そして、サッカーを通して、いろいろな友達とかかわるようになる。(図11)



図11 かかわりがどんどん増えていくA男

チームのじゃんけんをしたり、だれがキーパーをするか相談したりなどA男も輪の中に入り、楽しんでいた。

そんなある日、外でのサッカー中にR男と接触して、A男が転んだ。かなり派手に転び、痛そうだった。R男はすぐに「ごめん！大丈夫？」と声をかけた。教師もまた怒ってやめてしまうかなと心配をした。しかし、A男は立ちあがって、サッカーにすぐに戻った。(図12) その後もサッカー遊びを楽しむ日々が続く。



図12 転ぶA男

好きな遊びの時間は、1時間半ほどである。サッカーを楽しむ子は、1時間半ずっとサッカーをして楽しむこともあれば、最初30分ぐらい遊んで、その後違う遊びへと展開していくこともよくある。

この日も、A男も含めサッカーを楽しんでいた。しばらくして一区切りがついたのか、「次はサッカーのトレーニングだ！鬼ごっこをしよう！」と遊びが変化していく。そして、みんなで築山のほうへ移動していった。するとA男はいかない。教師は「A君もやろうか！」と聞くと、「それはいい…」と答えてきた。サッカー広場に一人残るA男。教師もどうしようか悩んだ。

次の日、築山での「ハンターごっこ」が盛り上がり始めて、最初から鬼ごっこで遊びだす。A男は入ろうとしない。教師がA男に声をかける。「Aくん、一緒に鬼ごっこしない？」「だって、ぼく得意じゃないから…」とA男。(そうか、得意じゃないという思いから、鬼ごっこには参加したいと思わなかったんだ)「そうか、Aくんの気持ちはよくわかったよ！でも、サッカーであんないっぱい走ってカッコいいAくんだったら、鬼ごっこでもカッコいいんじゃないかな～？」と教師は声をかけた。A男は「そうかな…、じゃあ、逃げるほうならしたい！」と言う「よし！じゃあ入れてもらおう！」と教師は鬼ごっこの集団にA男を連れて行った。

A男は実は走ると結構早かった。(図13) そして、ハンタ



図13 走ると実は速いA男

ーごっこはけいどろとルールは同じで、捕まっても、仲間が助けてくれる。

A男は助ける役としても、仲間をどんどん助けていった。そして、みんなで鬼ごっこを楽しむことができた。

(考察)

サッカー遊びをみんなとする、鬼ごっこをみんなとするといった協同的に遊ぶことはA男にとってとてもハードルの高いことであったであろう。しかし、A男の思いをくみ取ってくと、「失敗するのがいや」「やったことがないから心配」という思いから遊びに入らなかったことも見えてくる。それだけ、新しいことに挑戦するというのはA男の特性からしてとても難しいのである。

しかし、サッカーボーリングという形からA男の思いを十分引き出しながら、ボールにこだわる、ピンにこだわるなど特性に寄り添い楽しんできたことで、次への遊びへとつなげることができた。それは特性を生かしながら、レデュネスを作り上げていたのかもしれない。そして、教師がタイミングをみて、集団へと誘う。きっとタイミングを間違えると入れなかったかもしれない。A男なりに満足感を味わいながら、次のステップへと繰り上げてあげることがこのサッカーから鬼ごっこの流れではできたと考える。

3. 鉄棒遊び (令和3年1月)

冬になり、園庭で遊ぶのが酸くなってきてからも、A男は遊戯室で毎日鬼ごっこをして楽しんだ。鬼役でも逃げる役でもどちらでも楽しむことができるようになっていた。

一方鉄棒に興味を示す幼児が増えてきて、遊戯室で挑戦する子も増えてきた。教師は、もっと身近に感じて遊びこんでほしいと願い、保育室に鉄棒を常設した。すると、A男も鉄棒に興味を示しだす。今までは一切触ってこなかった。それは自分ではできないと思っていたからである。教師が鉄棒に誘うと「えー、できないよ」と拒否をした。

「じゃあ、A君、力あるし、ダンゴムシの技をしてみようよ」と鉄棒にぶら下がる技を提案する。すると、「やってみようかな」と挑戦する。そして見事に出来た。

「A君、すごいじゃん！！さすが力ももちだね！」と教師は大いに褒めた。



図 14 前の子の様子をしっかり観察するA男

すると、次は「まえまわり」に挑戦する。前にやる子の様子をしっかり見ている。(図 14)

教師も補助をしていくと、上手に回ることができた。その日から、A男の鉄棒への挑戦が始まる。教師も、「鉄棒名人ボード」を出して、全体として意欲が高まるように援助したり、自分の努力が見える化していくようにしたりとしていった。(図 15)



図 15 鉄棒名人ボードによって見える化していく

そして 12 月になると、「鉄棒めいじんカード」として個人カードを作り、A男もそれをもってさらに意欲をもって鉄棒に挑戦していく。(図 16)

A男はかなりの技ができるようになってきた。しかし、「さかあがり」だけができない。他の子供たちも同じく練習を重ね、出来るようになってきた。A男も諦めずに、それこそ何回も何回も練習をした。



図 16 鉄棒名人カードに取り組むA男

その頑張り教師はみんなの時間でも取り上げ、全体に広げていく。

そして、1月ついに逆上がりが出来た。毎日練習を重ね、ある意味特性を發揮しながら、取り組んできた。教師もその姿を認め、応援をしてきた。

そのプロセスも周囲の子たちも見えてきたので、「逆上がり」が出来た時は、教師も含めみんなで喜びを分かち合った。3月には「ピカピカショー」として、年中、年少の前で自分たちの得意を発表した。A男はもちろん、鉄棒を披露し、たくさんのお客さんを目の前にして、得意になった逆上がりと地球回りを披露した。(図 17)



図 17 ピカピカショーで発表するA男

(考察)

鉄棒でも、最初は経験がないことだったので抵抗を示したA男。しかし今までの成功体験などもあり、挑戦することに対して前向きになってきていた。そこに教師は励ましながらA男の背中を押していく。

小さな成功体験を繰り返しながら、教師はその姿を学年の発表として取り入れた。A男は自信をもって鉄棒を披露する。そのことで自らの自信につながり、達成感、成就感を味わったのではないだろうか。それが人前でのA男の姿へつながったのだろう。

V. 学校生活の中で力として発揮する(前期課程 1 年)

1. 授業参観の姿から(令和 3 年 4 月)

A 男が 1 年生になり、4 月の第 1 週目。前期課程の授業の様子を見に行った。私は A 男の姿を心配していた。しかし、授業の様子を見ていたらそのような不安は一切なくなった。

A 男は担任の先生に自分の知っている数字や文字を自由画帳に書き、見せていた。担任の先生はその頑張りを十分認めていた。A 男の表情はとても穏やかで、自信に満ちている。授業の中でも A 男は前々で堂々と発表している姿を見ることができた。

授業後、A 男の担任の先生と話した。担任の先生は A 男の特性を十分理解した上で、A 男の姿に寄り添っていることがよくわかった。移行支援で、A 男について伝えているが、担任の先生は、入学してから A 男の姿を見て、本当の特性を見極め、適切な指導をされていた。まずは A 男が安心感をもって学校生活を送ることができるように寄り添う。その姿勢を見て、私も安心し、また育ちが繋がっていきそうな期待感であふれた。

2. 幼小交流活動の姿から(令和 3 年 10 月)

10 月に幼稚園の年長と A 男がいる 1 年生と一緒に幾久公園に園外保育へ出かけた。グループに分かれ遊んでいくのだが、A 男は同じグループの幼稚園の子が「鬼ごっこをしたい」というのを聞いて、「じゃあ、僕が鬼をするよ」と言い、自ら鬼役をした。(図 16) そして、幼稚園の子たちを追いながら、みんなで楽しい時間を過ごすことができた。

年中、年長と少しずつプロセスを経ながら鬼ごっこ遊びに親しんできた A 男。しかし、鬼ごっこを楽しむまでは簡単な道のりではなかった。A 男の特性に寄り添い、納得した形で鬼ごっこ遊びに触れ、楽しんできた経験が、次 1 年生になって、幼稚園の子に対して自らが鬼役となって楽しませようと力を発揮していく。それは A 男にとっての繰り上がっている姿を見ることができた。その姿を見て、A 男に「鬼ごっこの鬼になって、幼稚園の子と遊んでくれてありがとう」と声をかけるととても嬉しそうだった。でも一番嬉しかったのは私自身だった。



図 16 自ら鬼役をして一緒に遊ぶ A 男

3. 給食参観の姿から(令和 3 年 11 月)

A 男の担任の先生とは A 男の育ちについてもいろいろ連絡をいただける。その中で、「給食をととても頑張っていますよ」という話を聞いた。そこで、幼稚園の年長への給食の在り方、そして 1 年生の給食の仕方などの把握もかねて、給食参観にいった。そこで私は目を疑う。

A 男は早い時間に一つも残すことなく、きれいに完食をしていた。幼稚園の時に姿を知っている私にとっては、信じられない光景であった。(図 17)



図 17 給食を黙々と食べる絵 A 男

幼稚園の年中の時は、牛乳と白いご飯しか食べなかった。いろいろ誘うが、難しい。年長になって副菜も一口ずつ食べることができるようになってきた。しかし、半分も食べることが出来ないまま、卒園を迎えた。

この繰り上がりは何だったのだろうか。

給食の質が幼稚園と前期課程で変わったことも大きな要因なのかもしれない。しかし、A 男の特性としてはそれを凌駕する好き嫌いであった。

担任の先生と話をしていくと、教育実習生に給食につ

いて褒められた経験、そして家庭での協力も大きかったようだ。A男は様々な人と関わりながら、成長してきたのである。そして、担任の先生もA男の好き嫌いに寄り添いながら、少しずつ働きかけてきたのだろう。幼児期から食に対して嫌なイメージはなるべく持たせず、本当のステップで食に関しては行って来た。そして、1年生になり、特性に寄り添いながらも、担任の先生が家庭を巻き込みながら、グッと引き上げる。これはサッカーの事例と同じでタイミングが重要だったと私は考える。

VI. 全体考察

1. 幼小接続の大切なこととは

(1)力を発揮し続ける

1年生は1年生になってから、力を発揮するわけではない。それぞれの幼稚園、保育園、こども園でその子なりの力を十分に発揮し続けてきたはずだ。そのプロセスを1年生になってからも紡ぎ続けることが大切だと考える。それがその子が力を発揮し続け、より主体的に学び続けることができる原動力となっていくのではないだろうか。

今回はA男の育ちを中心に見ていったが、それはどの子供にももちろん当てはまる。A男までとはいかなくともそれぞれの個性、特性を一人一人が持っている。幼児教育ではその個性、特性に寄り添い、集団の中で生かしながら、個の成長と集団の高まりを図っていく。個を尊重し、その子が1年生になった時に、幼児期と同じように力を発揮しつづけるためには、その子の特性をつないでいくことがまず大切であろう。その子の良さはなんなのか。それを1年生の先生が理解しているだけで、かかわりは変わってくると、1年生の先生を見ながら感じた。

(2)連携から接続へ

附属幼稚園は令和2年度に附属版幼小接続カリキュラムを作成した。それは、資質能力をベースに育ちをつないでいくことを意識して、5領域でわけて書いてある。今までは、交流をしたり、気がかりな子の情報交換をしたりと連携にとどまっていた。これからは一人一人の育ち、資質能力をつないでいくことを幼稚園、前期職員が共に考えていくことが幼小接続へとつながっていくと考える。

そのためには4月の週案と一緒に考えていくことも大切であり、年長後期から1年生の1学期と長期的な見通

しをもってどうしていくかを幼稚園教員、小学校教員がともに考えていくことが大切であろう。それが幼小接続へとつながっていくのではないだろうか。

(3)個を支える体制作り

今回はA男の育ちを追って、幼小接続を考えている。しかし、配慮が必要な幼児は他にもたくさんいる。それぞれの個の特性をお互いが把握し、支えていく体制作りが重要である。年に2回の移行支援だけでなく、ごろから、年長の様子を前期課程の先生に見ていただいたり、交流の中で、育ちを共有していったりと、日ごろから育ちを共有していく文化を体制として組み入れ、組織化していくことが大切だと考える。

特別支援コーディネーターの先生には、幼稚園の遊びの様子を日々丁寧に見ていただき、また幼稚園職員に示唆してくださる。幼稚園職員の見方、考え方がその子の成長を支えることに大きな意味を持つてくるのならば、教員自身のスキルを上げていくことが大切だと考える。

2. これからの展望

附属幼稚園、附属義務教育学校の幼小接続はA男の育ちからもわかるように、かなり効果を上げてきている。それは令和元年度、2年度と前期の先生方と幼小接続について一緒に考え、週案作成を試みたり、カリキュラム作成のためにいろいろアイデアを出し合ったりしてきたプロセスがある。そのプロセスの上に今の幼小接続の効果へとつながっている。この高まってきた幼小接続をここで止まらせてはいけない。年長担任、前期課程1年生の担任が誰になっても子供たちの個性、特性に寄り添い、それを生かし集団として高めていく幼小接続を継続していくためには、全教員がお互いの授業、保育を見合い、事例を読み合いながら、お互いの教育を理解していく。そしてそれを支える幼小接続カリキュラム、幼小接続会議などの体制づくりを日々見直ししながら、繰り返していき意識をこれからも持ち続けていきたい。

[参考文献]

- 福井大学教育学部附属幼稚園 (2019) 「研究紀要 vo25」
- 文部科学省 幼稚園教育要領(2018)
- 文部科学省 幼稚園教育要領解説(2018)
- 福井県幼児教育支援センター(2014) 「学びをつなぐ 希望のバトン カリキュラム」